

アテネ・オリンピックに見る  
表彰選手への低レベルインタビュー

近藤 節夫（会員）

一、NHKも容認した言葉遣い

「優勝おめでとうございます」

「ありがとうございます」

アテネ・オリンピック表彰式直後のお決まりインタビューである。金メダル獲得という祝勝ムードいっぱいの中で、聞き手も優勝選手もすっかり打ち解けたお祭り気分浸っている。だが、総じて相も変らぬ間違った日本語話法のオンパレードなのである。選手はまだいい。しかし、話し方のプロであるインタビュアーには、改めて苦言を呈さなければなるまい。

筆者は、二年ほど前「ありがとうございます」の話法について、本誌二五九号（平成一五年一月一日発行）への寄稿『ありがとうございます』は動詞か？』の中で、「ありがとうございます」という感謝の気持ちを表す言葉が、いまや「ありがとうございます」と抵抗もなく使われているが、それが文法的にも、また国語的用法からも間違いであることを、事例を挙げて指摘し、具体的、かつ論理的にその理由についても詳述した。

その辺りの経緯についても改めて触れておく必要がある。特に、言葉の普及に大いなる責任を有する、公共放送NHKの当時の責任者、NHK放送文化研究所放送研究部用語研究室柴田実氏、及びNHKアナウンス室担当部長高橋敦之氏と何度となく話をした。その議論の中で最終的に『ありがとうございます』は文法的に間違いではある（筆者の見解は文法問題とは一切関係なく、この言葉自体の存在を否定する）が、いまや慣用的に使われ一般に普及しているので『ありがとうございます』は必ずしも間違いとは言えない」と認識している（受け入れている）との説明を受けた。

正しい日本語の普及という観点で、全国民に対して大きな課題と責任を背負っているNHKとしては、大切なテーマを自己流に解釈し自社職員に間違った言葉遣いを押し付けている点で、いささか思慮に欠け無責任の謗りを免れない。しかしながら、柴田氏からアナウンサーの言葉遣いはアナウンス室の主管であると責任を押し付けられた形の高橋氏も、最終的には筆者の主張と考えを受け入れ、これから一〇〇%とまでは断言出来ないが、出来るだけアナウンサーが「ありがとうございます」と話すよう指導したいと約束してくれた。そして、その効果はすぐ表れた。その週末の放送からそれまで「ありがとうございます」と言ったことがなかったU有名女性アナウンサーをはじめ、ほとんどのアナウンサーがはつきり「ありがとうございます」と正しい日本語を話したのである。漸くわが意が通じてやれやれと安堵したものである。

ところがそれがあつという間に急展開した。舌の根も乾かぬ間にと言ったらよいだろうか、

僅か一ヶ月足らずで件の女性アナウンサーをはじめ、ほとんどのアナウンサーが開き直ったかのごとく「ありがとうございます」と間違い話法へ回帰したのである。いとも簡単に見事に朝令暮改をやったのけたのである。それにしても彼らの見解は見解として、日本語の根幹に関わる話法については、この本質と対象が違うのではないかと思う。しかも約束が実行されたばかりで、当事者である筆者には朝令暮改実施前後に何らの相談も了解もない。彼らの言動は日本語、否言葉を弄んでいるとしか思えない。その急激な変化と間違い言葉への回帰現象の裏に何があったのかは知らない。だが、筆者はこの時点で、NHKという「ぬえ」のような組織は、体面を重んじて体裁だけを「取り繕い」、実は組織内に良識と真つ当な規範というものさえなく、外部の正しい指摘に対して聞く耳を持たず、自分たちの思い通りにことを進める傲慢な体質を有していることをいまさらのように思い知らされた。

## 二、「おめでたい」になりました」は、正しい日本語か？

冒頭のやりとりの中で珍妙な言葉、「おめでどうございました」を取り上げたが、こんなおかしな日本語が一体全体どこにあるというのであろうか。ほんの少し前まで存在さえしなかった言葉である。まったく認知もされていなかった。誰がいつ使い出したのか？ いつの間にか言語に素養のないアナウンサーたちに支えられ、彼らの思いつきだけで私生児として一人歩きするようになった。考えてみれば分かるが、いま目の前にいるメダリストに対して、祝意を伝えるのだから素直に「おめでどう」の表現で充分であり、もう少し丁寧言えば、「おめでどうございます」で充分真摯に祝意を表している。このうえ番外的に「おめでどうございました」という奇妙な言い回しをことさら使う必要があるだろうか。NHKも民間放送もアナウンサーというアナウンサーはみんな、こんな「おめでどうございました」などという最近までありもしなかった言葉をムードだけでプロデュースして、それが本場に正しいとも思っているのであるうか。もう少し自分たちの発言に論理性と責任を持つてもらいたい。オリンピック開催中、誰も彼もが深く考えることもなく、「おめでどうございました」とメダリストに祝意を述べていたのである。まったくもっておめでたい人たちである。これについては、本誌二五九号でも指摘したようにもう一度断言する。「おめでどう」も「ありがとう」同様に、動詞の過去形的使用をされることはありえない。

前記NHK識者のひとりと話を交わした当時、「ありがとうございます」が世間に認知されていると強調でもせんがためであろうか、その識者は比較対象としてこんなことさえ言っていたのである。『おめでどうございます』という言葉が『おめでどうございました』と使われるのは、絶対間違いであるが………」

毎日、毎日日本選手が活躍したアテネ・オリンピックではあるが、テレビで「おめでどうございました」ありがとうございます」と繰り返されるインタビューを目にするたびに、慶事に冷水をぶっかけられているような浮かない気分陥ったものである。同時に、言葉(日本語)の破壊を一步進めているなあと忸怩たる思いに駆られ、相変わらず性懲りもなく、よ

くも間違った日本語の濫用と、日本語の破壊を繰り返して平然としていられるものだと呆れたものである。

終わりに、全国のすべてのアナウンサーに聞きたい。

① あなたは、「ありがとうございました」と「おめでとございました」は日本語の表現として間違っていると思いませんか。

② あなたは、自分自身が間違った話法で日本語を破壊しても何とも思いませんか。

③ あなたの組織には、正しい日本語を正確に伝えようとの声が上がりますか。

④ あなたは、放送中正しい日本語を話す気持ちを持ち続けていますか。

もし、これらの質問に対して否定的な答えをされ、いささかの疑問も持たないとするなら、あなたはますますにアナウンサーを辞めた方がよい。あなたはアナウンサーという職種を武器に、間違いなく美しい日本語を破壊することに加担しているからである。